- 1 派遣期日 平成28年8月5日(金)
- 2 派遣先 学校名(会場名) 筑波大学附属小学校
所在地 東京都文京区大塚 3-29-1
<http://www.elementary-s.tsukuba.ac.jp/index.html>
- 3 研修内容
 - (1) 公開授業参観 3年生説明文「いるかのひみつ」→協議会
 - (2) 公開授業参観 2年生文学 「おまえうまそうだな」→協議会
 - (3) ワークショップ アクティブラーニングで思考力・表現力を促す
—ごんぎつね・やまなし等の授業で—

4 感想

(1) 公開授業参観 3年生説明文「いるかのひみつ」→協議会 について

授業は、筆者の名前を確認することから始まりました。本文を音読した後、授業者の東京都大田区立大森第五小学校の藤田伸一先生は、「何か、数えたいことがある人？」と問いました。すると子どもたちの方から、「段落を数えたい。」「いくつ実験をしたか、数えたい。」などと、その後の流れの中心となる意見が出され、それを拾い上げて授業が展開されていきました。

授業を参観して感じたことは、子どもたち同士の話し合いで思考が深まっていくような発問の工夫が必要であることです。藤田先生は『しかけ』とおっしゃっていましたが、子どもたちが、ただ意見を出し合うだけでは対話的な学びにはなりません。対話によって思考しているか、思考が深まることが「アクティブ」なのだと感じました。

また、協議会で『文章をじっと読むことも、「文章と対話する」ということ。文章と対話することも対話的な学びである。』という言葉が印象に残りました。何をねらいとし、子どもたちが考えたいと思うような問いを用意すること、子どもたちの意見交換が中心の授業であっても子ども任せにせず、よりよい考えに練り上げるために教師が積極的に出たり、教科書に立ち返らせたりする教師のタイミングが必要であることを学びました。

(2) 公開授業参観 2年生文学 「おまえうまそうだな」→協議会

授業者の筑波大学附属小学校桂聖先生が教材文を読んだ後、低学年らしく8つの場面絵に少しお話の筋が書かれている掲示物を使って授業が行われました。授業は、お話のいいところを意見の交換をしながら、ティラノサウルスとウマソウの関係の変化に気付かせていく展開でしたが、時間が足らずまとめまでいきませんでした。この後どのようにまとまったのか気になりました。

子どもたちの手元に教材文がなかったためか、意見に想像が混じったり、挿絵を見て感じたことだったりしていたのが低学年らしいと感じました。しかし、自分の意見を積極的に発言する姿や、ティラノサウルスのせりふの「さよならウマソウ・・・」の「・・・」に注目する様子など、普段の授業での積み重ねの大切さを感じました。

自分の意見を臆せず発言する様子には、何を言っても受容される教室の温かい雰囲気作りが必要であると考えます。自分とは異なる意見に対して、違いだけを意識させるのではなく、「〇〇さんが、こう考えた気持ちが分かるかな。」のように返すことによって、思考過程の共感的感情理解を促し、自分の気持ちや意見を大切にしてもらえる安心感を感じられるようにしていきたいと思いました。

(3) ワークショップ アクティブラーニングで思考力・表現力を促す

—ごんぎつね・やまなし等の授業で—

アクティブ・ラーニングとは、「あくまで精神活動をアクティブにするための方法であり、活動をさすのではない。活動自体が目的化したり、型にはめるのは△」や教師の役割は、ファシリテーター（黒子。お膳立てはするが、思考がより深まるように運営・支援・援助・引き出す・つなげる・整理する）だということを、改めて学びました。

また、思考力・表現力を促すアクティブ・ラーニングの授業とは、子どもが考えたくなる、話したくなる、聞きたくなる、書きたくなる課題や発問の工夫をすること、さらに思考の手立てとして、順序・比較（対比、類比）・因果関係・類推・仮定・分析・分類・一般化（まとめ）などがあることを学びました。

その後、実際に「比較」を使った高学年での実践事例、初読の疑問や感想から発問を工夫した実践事例、作者を多角的に捉えることで読みを深め、表現する活動へ発展した実践事例と児童の作品など、具体的なお話を聞くことができ、大変勉強になりました。

どの実践でも感じたことは、勝手な空想や思い付きの言葉でなく、あくまでも本文（叙述）から意見や答えを探すということです。そして、子どもたちの考えを揺さぶるような芯の通った問いを作れるかが教師に求められていることを感じました。